

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」



特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝

「このケースは生徒指導?それとも特別支援?」

6月19日(金)に開催した「能代市特別支援教育学級担任等研修会」では、通級指導教室を担当している第四小学校の田崎先生と能代第二中学校の金子先生の実践紹介に続き、グループ協議を行いました。その中で共通テーマ「生徒指導か特別支援かどちらの面での指導が必要なのか分からず困っている」について、私の見方を紹介します。

学校は子どもが社会の中でよりよく生きていけるように「土台をつくる場所」である。生徒指導と特別支援教育は、どちらも「全ての子どもの成長支援」が目的で、児童生徒理解やアセスメントを基盤に「教科指導と生徒指導、特別支援を一体的に進める」ことが求められている。

生徒指導の中に「特別支援教育の視点を取り入れる」ことが強調されている。どのような場合に生徒指導に加えて、特別支援教育の視点が必要になるのか。

- ・繰り返し指導をしても学習及び行動の改善が難しい、成果が上がらない。
- ・困難さの背景に発達特性の可能性があり、保護者と情報共有が必要とされる。
- ・問題の緊急性が高く、「個別の指導計画」を作成し、短いスパンで評価・改善が必要とされる。
- ・通級指導教室や特別支援学級等の利用が妥当と判断される。
- ・「個別の教育支援計画」を作成し、外部の関係機関との連携が必要とされる。



授業中に離席をする、他者や自分を傷付ける、読み書きが苦手であるなど、問題行動に見える行動を「指導」だけでなく、「発達特性理解」と「環境調整」からも見る、ルール遵守指導と並行して見通し提示や視覚支援など合理的配慮を行う、指導記録だけでなく、「個別の教育支援計画」や「個別の指導計画」を作成して校内で共有するなど、生徒指導と特別支援教育を分けて考えすぎず、「一人一人の子どもを理解し支える」という共通の視点で協働することが重要である。

線を「どこで引くか」よりも、「このケースは生徒指導でどこまで対応し、どこからを特別支援教育として校内支援体制に乗せるか」、「どちらが主導か、あるいは協働か」を特別支援教育コーディネーターと生徒指導主事を中心に検討しながら進めると校内で動きやすくなる。

子どものよさを伸ばして社会生活に必要な規範意識を育てる生徒指導と、子ども一人一人のニーズに応える幅の広い特別支援教育は密接に関連し合う。そして、特別支援教育の理解と支援の考え方を学校全体に広げることは、生徒指導の充実につながる。

**とれたて直送便****【口数を減らしたら、子どもが変わった】**

5歳児健診で、「食事の際に姿勢が崩れるとすぐ注意しているけど、変容が見られなくて困っています」というお母さんの悩みを聞きました。子育てのコツは「おだやかに・くりかえし・ゆっくり。そして、口数を減らすことです」とアドバイスをしました。

そのお母さんと保育園で会う機会があり、その後の様子を尋ねたところ、「細かいことは注意せず、きちんと座っているときに笑顔でほめるようにしたら、びっくりするくらい変わりました」とうれしそうに教えてくれました。私は「お母さん、これからは肩の力を抜いて子育てを楽しんでください」と笑顔で伝えました。